✳ PROGRAM ✳

芥川也寸志
交響管弦楽のための音楽

プロコフィエフ
組曲「キージェ中尉」

ハチャトゥリアン
バレエ音楽「ガイーヌ」
（ボリショイ劇場版）より抜粋

【プロローグ「友情」】
導入部、友人たちの踊り、嵐

【第1幕】
レズギンカ（若者たちの踊り）、
ウズンダアラ（ヌーネと娘たちの踊り）、狩人たちを待つ、
ガイーヌとアルメンのデュエット、アイシャとアルメンの場面

【第2幕】
バラの娘たちの踊り、ヌーネとカレンの踊り、
アイシャとガイーヌの場面、ガイーヌとアルメンの愛のデュエット、
ゲオルギーのモノローグ

【第3幕】
山あいの村、アイシャのモノローグ、山岳人の踊り、
山の若者たちの踊り、ヌーネの踊り、
タンバリンをもった娘たちの踊り、
剣の舞、収穫の祭

森口真司 Conductor 指揮者

大阪府出身。京都大学文学部を経て1995年東京藝術大学大学院指揮科修了。指揮法を田中良和、遠藤雅古、フランシス・トラヴィス、若杉弘の各氏に師事する。大学院修了後すぐ「プラハの春」国際音楽コンクール指揮部門に於いて第3位受賞（1位なし）。以降、東京フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、札幌交響楽団など全国各地のオーケストラに客演する。岩城宏之氏に認められ2003年から2年間オーケストラ・アンサンブル金沢専属指揮者、2002年から2009年まで東京混声合唱団コンダクター・イン・レジデンスを務めた。またオペラ指揮者としてこれまで30を超す作品を100回近く指揮した。
東京藝術大学、二期会オペラ研修所講師を経て、2008年大分県立芸術文化短期大学音楽科に着任する。現在は本拠地を九州に移し、数々の重要な公演の指揮を任されている。
現在、大分県立芸術文化短期大学音楽科教授。

フライハイト交響楽団

Freiheit Sinfonie Orchester

当団は、1996年4月、東京都内および近郊の大学オーケストラに所属している学生、及び卒業した社会人が中心となり音楽文化の交流を深める目的で結成されました。毎年2回の定期演奏会を中心に、古典ロマン派からアマチュアでは取り上げる機会の少ない難易度の高いプログラムまで、様々な時代や編成の楽曲に意欲的に挑戦しています。
当初はJMJ（青少年日本音楽連合）で活動していたメンバーが中心でしたが、年を重ねて幅広い年齢層、様々なバックボーンや経験を持つメンバーが増えた現在も、結成以来変わらぬ音楽への情熱と団員間の厚い信頼をベースに、常に聴衆を魅了する質の高い演奏を実現すべく、アンサンブル力や表現力の向上に取り組んでいます。

【フライハイト交響楽団のホームページ】
今後の演奏会情報、またこれまでの活動実績等がご覧頂けます。

http://freiheit-sinfonie-orchester.s3-website-ap-northeast-1.amazonaws.com

AKUTAGAWA PROKOFIEV KHACHATURIAN

PROGRAM NOTE

芥川也寸志
交響管弦楽のための音楽

作家・芥川龍之介の三男である芥川也寸志（1925-1989）は、日本の戦後音楽界を代表する作曲家であるとともに、NHKテレビ「音楽の広場」の司会をはじめテレビ・ラジオにおいても活躍しました。

芥川の誕生日である1925年7月12日は、日本でラジオの本放送が始まった日でもあります。「交響管弦楽のための音楽」は、この放送開始から25周年を記念するNHK放送25周年記念事業の懸賞募集管弦楽曲への応募作として作曲され、團伊玖磨の交響曲第1番とともに特賞を受賞した彼の出世作です。

芥川は、師である伊福部昭の影響を受けつつ、ストラヴィンスキーやショスタコーヴィチといったソ連・近現代ロシア音楽のダイナミズムを独自の感性で取り入れました。特に「オスティナート」という比較的短いフレーズを繰り返し演奏する作曲技法を多用していることが特徴です。

「交響管弦楽のための音楽」も、緩・急の二つの楽章のほぼ全域に均一なリズムが刻まれたオスティナート書法が施されており、疾走感あふれる第2楽章ではシンコペーションや三連符が効果的に映え、最後はオーケストラ全体が熱狂的に盛り上がります。知的でありながらも聴き手を興奮させるこの曲の魅力をお届けできれば幸いです。

（ホルン　信岡良典）

参考：新・3人の会「芥川也寸志−昭和を生き抜いた大作曲家（日本の音楽家を知るシリーズ）」

プロコフィエフ
組曲「キージェ中尉」

セルゲイ・プロコフィエフ（1891-1953）の交響組曲《キージェ中尉》は、1934年に制作された同名映画のための音楽をもとに編まれた作品で、物語は架空の人物「キージェ中尉」が実在しないまま、昇進や結婚など珍事件の数々を描く風刺的・喜劇的な内容です。

プロコフィエフはこの奇想天外な物語を、皮肉とユーモアに満ちた音楽で鮮やかに表現し全5曲からなります。

第1曲「キージェの誕生」では、遠くから響くコルネット（実際の演奏は舞台裏）が物語の幕開けを告げ、行進曲に挟まれたロシア風のモティーフがキージェの存在を象徴しています。

第2曲「ロマンス」ではテナーサクソフォンが哀愁を帯びた旋律を歌い、甘美でどこか物悲しい雰囲気を醸し出します。

第3曲「キージェの結婚」は優雅さの中に滑稽さが潜み《祝いの音楽》《コルネットによるサロン風の軽妙なメロディ（途中で転調あり）》《キージェのモティーフ》で構成されています。

第4曲「トロイカ」（3頭立ての馬ぞり）は酔った役人たちがキージェを迎えに行くシーンで、軽快なリズムが雪原を駆ける馬ぞりの疾走感を表しています。

第5曲「キージェの葬送」ではコルネットの主題が冒頭と最後にされ幻想は静かに幕を閉じますが、その間はキージェの人生を回想するかのように様々メロディが辿っております。

ユーモラスで親しみ溢れるメロディに、ロシア民謡風の纏綿たる情緒もあり、とても素敵な音楽に加えて高音から低音まで幅広く管弦楽を使い、色彩が豊かで聴き手にも親しみやすい魅力と風刺と抒情が交錯するこの作品を、ぜひお楽しみください。
※なおコルネット奏者が曲の途中で出入りしておりますが楽譜の指示ですのでご了承ください!!（入りそびれたとか、忘れ物したとかではありませ〜ん）

（トランペット　米田倫之）

ハチャトゥリアン
バレエ音楽「ガイーヌ」（ボリショイ劇場版）より抜粋

みなさん、アルメニアの大作曲家ハチャトゥリアンはお好きでしょうか。私は大好きです。本日も演奏する超有名曲「剣の舞」は、バレエの作曲にあたり一晩で書き上げられたといわれています。このエピソードこそ、彼が天才と称されるゆえんでしょう。レニングラード劇場で初演された原典版から改訂を経て整えられたボリショイ版は、民族舞踊に根ざした色彩豊かな舞曲を軸に、場面ごとに性格の異なる音楽が連なる構成が特徴です。本日はこのボリショイ版を演奏します。
私は学生時代、このCDを繰り返し聴いていたので、今回演奏できとても嬉しいです。なんなら毎週やりたいです。

【プロローグ「友情」】
第1場
ファンファーレにより幕を開けます（**導入部**）。山あいに住む狩人たちとアルメン、友人ゲオルギーの生活が示され（**友人たちの踊り**）、嵐の中で滑落し意識を失ったアイシャを助ける出来事が物語の発端となります（**嵐**）。

【第1幕】
第1場「春」
舞台は村へ移り、若者たちの躍動と、ガイーヌの女友達ヌーネたちの踊りが次々に描かれます（**レズギンカ／ウズンダアラ《ヌーネと娘たちの踊り》**）。狩に出たアルメンを待つガイーヌの胸中（**狩人たちを待つ**）、そして二人の深い愛情がデュエットとして描かれます（**ガイーヌとアルメンのデュエット**）。

第2場「全快」
回復したアイシャはゲオルギーと次第に惹かれ合います。ある日、アルメンがガイーヌに渡そうとしていた花を、アイシャが無邪気に取り上げてしまい、アルメンは仕返しに彼女を抱きしめます。その場面をゲオルギーに見られてしまい、誤解と波紋を生むことになります（**アイシャとアルメンの場面**）。

【第2幕】
第3場「嫉妬」
狩の旅を前に宴が開かれ、華やぎの中、娘たちの踊りとヌーネと恋人カレンの若々しい踊りが続きます（**バラの娘たちの踊り／ヌーネとカレンの踊り**）が、アイシャとの一件から、ゲオルギーはアルメンと口論になります。一方で、アイシャとガイーヌは互いの心をなぐさめ合います（**アイシャとガイーヌの場面**）。

第4場「罪」（※本公演では演奏いたしません）
狩の途中、アルメンは崖から落ち宙づりになりますが、ゲオルギーは助けません。しかし幸いにも、別の狩人に救われます。

第5場「愛」
やがてアルメンは盲目となって戻りますが、ガイーヌはそれでも変わらぬ愛を注ぎ続けます（**ガイーヌとアルメンの愛のデュエット**）。一方、ゲオルギーは裏切りの重さに苛まれます（**ゲオルギーのモノローグ**）。

【第3幕】
第6場「良心」
山あいの村に住むアイシャは思い出に沈み（**山あいの村／アイシャのモノローグ**）、そこに荒々しい民族のエネルギーと若者たちの躍動が対比をもって現れます（**山岳人の踊り／山の若者たちの踊り**）。そしてゲオルギーはついに、自らの良心と向き合う決意を固めます。

第7場「贖罪」（本公演では曲順を変更し、剣の舞のあとに収穫祭を演奏します）
村では収穫を祝う祭りが開かれます（**収穫祭**）。祭りの高揚の中、ヌーネの踊りと娘たちの軽快な踊りが続き（**ヌーネの踊り／タンバリンを持った娘たちの踊り**）、やがてコーカサスの勇壮さを象徴する「剣の舞」が鳴り響きます（**剣の舞**）。この曲は祝祭の頂点として置かれ、全体のエネルギーを一気に解き放ちます。

祭りのさなか、絶望の中にあったアルメンは包帯を外して視力を取り戻し、ガイーヌと再び結ばれます。ゲオルギーも過去の過ちを告白し、物語は和解と希望のうちに幕を閉じます。

（トロンボーン　高橋重典）